二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版
新装版
聖天使ユミエル
シャドークルセイド

第一章　影を狩る者　006
第二章　出会い　018
第三章　天使光臨　059
第四章　哀しすぎる戦士の告白　096
第五章　仮面の闇に潜むモノ　113
第六章　聖少女の受難　161
第七章　絶望は終わらない　219

登場人物紹介

Characters

羽連(はむら) 悠美(ゆみ)／
光翼天使ユミエル

エクリプスと戦い続ける聖少女。内向的かつ純情無垢な人柄。しかし、その純粋さゆえに悪を憎む気持ちは人一倍強い。

一之瀬(いちのせ) 恵理子(えりこ)

天恵学園の二年生。風紀委員長を務める、正義感と行動力に富んだ少女。

新野(しんの) 瞳(ひとみ)

恵理子のクラスメート。口数の少ない冷静沈着な才女。

『第三章　天使光臨』より

「だ、誰がっ！　誰があなたなんかに許しを請うもんですか……！」
あくまで強気を崩さない聖天使、反撃に転じようと身体を動かそうとするも、邪眼の魔力呪縛は強烈で、未だに身体は思う通りに動かなかった。少女の思考に、焦りが募る。
「ふん、どこまでも小生意気なヤツだなテメエは！　ま、そっちのほうが嬲り甲斐があるってもんだがよォ。その強がりがいつまでもつか楽しみだぜ、ぐひ、ぐへひゃひゃ！」
ぐちゃ、にゅる……。汚らしい哄笑とともに、黄緑色に粘つく細い触手が無数に押し寄せてきた。それらはすべて、疣から出ている膿のような粘液がアメーバ状に伸びたものだ。かろうじて二本の足で立ち、身体の自由が利かないにもかかわらず気丈に怪物を睨みつける女戦士の周りを、粘液状の触手どもが取り囲んでいく。
「くひひ……テメエにやられた傷が再生するまで、まずはコイツで遊んでやらァ」
一気には襲わない。まずは触手が一本ずつ両脚に絡みついた。水っぽい感触が、薄いニーソックス越しに敏感な肌へ伝わってくる。それが粘っこく糸を引きながら上に向かって巻きついていき、豊麗な太ももを這い回って張りのある美肌を汚していく。
「く……くうぅっ……」
生温く不気味な感触に、思わず呻く聖天使。弾力ある太ももにきつく巻きついた触手はどんどんと高みへ――短いスカートの中にある、汚れない純白のショーツへ容赦なく進んでいく。天使はその先にある予感に身震いした。
ねばねばした感触の糸はすぐにショーツにまで到達した。そして、下着の上からラヴィ

アを撫で回すように蠢いて性感帯を刺激してくる。粘着質な触手は布地をぬちゃりと浸透し、鋭敏な秘部をじっとりと濡らしていく。両足から登ってきた二本の粘手は、別々に動いて時間差でショーツ越しに秘華を嬲りまくってきた。

「うあ……あ、や……くっ！」

鋭敏な秘所をスライム状の粘糸で弄られ、変身少女は敏感に反応を示した。汗の浮いた太ももをもどかしげに擦りあわせ、悩ましげな喘ぎ声を漏らしてしまう。

そんな可愛らしい反応に味をしめたか、触手はゆっくりとクレヴァスに沿ってなぞるような摩擦愛撫を続けてきた。その感覚に思わず股間を震わせる聖少女。嬲られている秘部を中心に下腹部から湧き上がってくる熱に、腰が浮かされてしまったようだ。

（あ、ダ。ダメよ……こんなのに負けちゃ！　わたしは、恵理子を……助けるんだっ！）

ユミエルは心の中で唱え、遠くで眠る大切な友達の姿を目に焼きつける。そして、歯を食いしばりおぞましい責めが伝えてくる快感の種を必死で打ち消そうとした。だが、その意志とは裏腹に肉体の芯は徐々に、そして確実に火照ってきてしまう。

「あくう……くぁ、うああうぅっ……ああ⁉」

ずちゅ、ずちゅずちゅずちゅっ！　突如、触手の責めが激しさを増す。ショーツ越しに何本もの触手が美少女の秘門にざわざわと密集し、一斉に責めてきたのだ。粘っこい水音を立てながら、幾つもの粘手が同じようにクレヴァスに沿って移動する。そっと割れ目をなぞられる感覚が連続で何十回も襲ってくると、意思に反してその感触に反応した陰唇が

徐々に動き始めてしまう。開きかけた秘唇は少しずつ湿り気を帯びてきており、べっとりと張りついたショーツ越しに感じる肉悦は強くなるばかりだ。
「あ、あふぅ……あん、ん！」
湧き上がる強烈な痒痛感に、思わず悶えた嬌声を漏らしてしまう。股からひっきりなしに伝わってくる扇情の波はもう止めようがなく、聖戦士はがくがくと膝を震わせていた。秘部を嬲りまくる触手の動きを少しでも牽制しようと内股気味に足を折るもまるで効果はなく、触手どものいやらしい動きはまるでとどまることを知らない。
ちゅぴちゅぴと濡れたもの同士が擦れあう音が響く中、前後運動を繰り返す触手の一本が方向を変えた。愛蜜と粘液とで濡れたショーツに浮いて見える秘穴に、その先端を無理矢理潜り込んできたのだ。布地の上からの接触なので奥にまでは届かないが、しかし僅かにでも敏感な粘膜を刺激されるむず痒い快感にユミエルは大きく腰を揺らし身悶えた。
従順な反応を愉しむように、入れ替わり立ち替わり、何本もの粘蛇が微妙な挿入を敢行していく。最初は少し潜り込むだけだったのが、回数を増すにつれ徐々に徐々に侵略の深度は増していき、いまではショーツを染み通って膣の入り口にまで手を伸ばしてくるほどだ。汚らしい触手で秘門を嬲られるたび、恥ずかしい蜜が少しずつ溢れてくる。
「うあっ、や、は。く、やぅ……ん！」
弱々しくかぶりを振り、女戦士は必死に湧き上がる快感を否定しようとした。しかし、何度も何度も細い触手を肉穴で出し挿れされると、潤んだ粘膜から全身に蕩けるような快

美感が走り反射的に腰を振ってしまう。淫靡に揺すられる股の間に、今度は纏めて三本のミミズが突き入れられた。

「や、あ、あっ！　そんなっ……お、奥まで……くふぅううっ！）

濡れたショーツが軋んで皺を作り、じゅぶじゅぶと音を立てながら肉襞に擦りあわされる。布地から浸透した粘液状の触手が、ついにその本体を膣中へと潜り込ませてきた。

（うぁ、だ、だめぇッ！　こ、こんな……直接、されたら……あ、ああ！）

汗を散らしはぁはぁと喘ぎながら、聖女はこれ以上の進行を食い止めようと震える指先で粘つく肉蟲を握ろうとした。が、もともとが固体ではなく膿状の粘塊である。掴もうとすると形が崩れ、ずるずると指の隙間を通ってしまい捕えることができない。結局、ユミエルの試みはつやつやと光る白手袋を粘液で汚すだけの結果に終わった。

焦燥感に駆られる中に、アメーバ状の触手が肉壁に絡みつくおぞましい感触が伝わってくる。それがお腹の中でうねり膨らみ、そして徐々に深く侵入してくるにつれ、今度はじんじんと疼くような快感が首をもたげてきた。流動的に蠢くゼリーを膣内に詰め込まれる感触に、女戦士の思考はピンク色の霧がかかったように不鮮明なものになっていく。

「くぅっ、だ、めぇ。そ、そんなの……だめ、だめぇ……い、あふうぅぅうん！」

甘えるような声で拒絶するものの、ユミエルは徐々に異形の快感に呑み込まれつつあった。お腹の中でアメーバがうねくるたびに痺れるような感覚が全身に走り、プラチナブロンドの少女は長髪を振り乱して快感に身悶えする。

左右に揺れ弾むお尻にも何本かの触手が糸を引いてくっつき、なだらかな曲線を描く媚肉を鷲掴みにするように、円を描きながらショーツに粘手が絡みついていく。溢れる汗と粘液、そして純白の生地全体を濡らすほど大量に分泌された恥蜜が垂れてきているせいで、可愛らしい桃割れに染みて下着の上からくっきりと形がわかってしまう。その割れ目に粘身を食い込ませながら、触手がユミエルの尻房を撫で回した。そのたびに大きく揺れるなだらかな二つの肉桃。たっぷりとその感触を味わいながら、粘蟲どもは後ろの穴にターゲットを絞った。濡れたショーツに浮き出しになっている菊座に、何本かの先端がゆっくりと埋没していく。禁断の排泄孔を責められる感覚に、変身少女の身体がびくりと震えた。

「ひ、ひあうっ！　そ、そっち……やぁ！　うしろぉ……うしろは、やめ……てぇっ！」

アナルに挿入される苦痛と嫌悪感に、ユミエルは涙ながらに懇願する。しかし、ショーツを押し込みながらゆっくりと肛門に入り込んでくると、自分の身体ではないように後ろの穴は貪欲に反応し、腸液を垂らしながら粘つく凶器を呑み込んでいく。流石に前の穴のように何本もの触手が入る余裕はないので、あぶれた触手は再び臀部をさわさわと嬲り、また肉を寄せてきつく締め上げた。肉を揉まれるとその責めに反応した尻穴がさらに窄まり、より深く腐肉を咥え込んでしまう。内側と外側から好きなようにお尻をいじめられ、ユミエルは苦悶と快感の入り混じった紅潮した表情で悔しげに喘いだ。

「ひひ、大層な感じっぷりじゃねえか。気高い天使サマは後ろが弱点かぁ、変態が！」

「や、くっ……そ、そんな。ちがっ……あ、んふぁああっ！」

恥辱に悶えるユミエルを新たな感触が襲った。純白のケープを盛り上げて震えているお椀型の美乳に、触手の群れが責めを加えてきたのだ。下陰部に加えられた激しい陵辱のせいで女戦士の乳首はびんびんに隆起し、もどかしげに揺れているのがボディスーツの上からでもはっきりとわかる。その突起に、白いケープをたくし上げて肌着の上から数本の粘手がたかっていった。粘液触手に巻きつかれきつく締めつけられるたび、先端の小さな肉芽はびくっと過敏に反応し、痺れるような快感が身体中を駆け巡る。たまらずに大きく背中を反らすと、張りのあるCカップの美乳が小気味よく震えた。

（うあっ、お、おっぱいまで。だめ……こ、こんな。こんなの。わたし、も、もう……！）

無数の触手に全身を責め嬲られ、ユミエルの思考は真っ白になりかけていた。倒すべきヒキガエルの怪物、そしてなにをしてでも助けねばならない『友達』――それらが視界に入っても、どろどろに溶けた思考が考えることをしてくれない。敏感な個所を嬲られ弄られ、戦士としてよりも女としての自分が、快楽を無制限に求めてしまっている。

「はぁ、はぁ、はぁ……くふぅううっ。え、えりこ……はあぁ、ん、んんん！」

友達のことを思いながら、ユミエルは無意識のうちに、全身を大きく前後に揺すっていた。そのたびに柔らかい乳房が形を崩し、桃尻がたぷたぷと揺れ、止めどなく溢れる汗と触手の粘液が混じりあって辺りに乱れ飛ぶ。厳かな白金色の長髪は乱れまくり、朱色に火照っている艶っぽい顔に汗でべっちょりと張りついていた。快楽を否定するためでなくより貪るために、意思に反して肉体が勝手にくねくねと淫乱な舞を踊ってしまっている。

「ぐふへぇ。お前、変態だなぁ。きたねえ触手に責められて、そんなによがりまくって、股をべちょべちょに濡らしてよぉ。それでよくも天使なんて名乗れるもんだァ」
「い、いや、いやっ……。そんなこと、言わないで……っ」
トードエクリプスの卑猥な言葉責めに、真っ赤に上気した顔を振る清純少女。羞恥心という決定的な油を注がれ、少女の官能は手のつけようもないほどに燃え上がる。
「やあ、やぁっ！　こんなの、やなのぉ……んあ！　あ、ふぅ、ふぅんっ……」
ちゅるり、と淫靡な水音を立てながら、ユミエルを責めていた触手が退いていく。そのどれもが聖女の体液で照り光っていた。肉門から蜜で白く濡れた粘糸が引き抜かれると、女戦士は膣の中でゼリーが移動する感覚に反応して「あんっ」と声を上げる。そのときも、はしたない液が新たに漏れ出して太ももを伝わりニーソックスを濡らした。天使の肉体を蹂躙していた触手どもが退いていくと、影の狩人はガクリと膝を折り力なく地面にへたり込む。光り輝く翼は力なく萎れ、天使の精神が限界にきていることを示していた。
「くっくく。それじゃあ……本番といくかァ！」
疣の中に触手を収納したトードエクリプスが、半死半生の天使に迫ってくる。
「……っ！」
意識が溶けるほどの陵辱を受けながらも、ユミエルは倒すべき怪人の声に反射的に顔を上げた。霞む視界の中で、ヒキガエルの怪物が涎を垂らしながら欲情に身を滾らせ近寄ってきているのが見える。迫りくる絶望。だが少女戦士の目はしっかりと見ていた。蛙の左

腕は折れたまま再生しておらず、バケモノの腹に空いた風穴は、未だに塞がっていない。怪物は最大の急所を、まるで無防備に晒しているのだ。

幾多の戦いをくぐり抜けてきた戦士の直感が、これは最大のチャンスだと教えている。エクリプス最大の弱点、それは彼らが人間の一番汚い欲望から生まれてきたものだということだ。だから、影の怪物は己の欲望のためにありえない隙を作る場合がある。

そう、まさしくいまこの瞬間のように。

「う……くうぅあ……んあぁっ！」

ユミエルはなんとか立ち上がろうとした。邪眼による呪縛はほとんど魔力を失っている。だが、嬲られた肉体は熱に浮かされ言うことを聞いてくれない。腰に力が入らないばかりか、指先までが震えるだけで全然動かない。陵辱による背徳的な脱力感と徹底的に肉体を責められた疲労とが、天使の意志を身体に伝える術を奪ってしまっていた。

「へへへ……う、美味そうだァ。ぐひひぃ！」

悔しさに貌を染める変身ヒロインに、トードエクリプスはその醜怪な肉体をのしかからせてきた。右腕に凄まじい力を込めて少女の肩を掴み、尻餅をつきながらもなんとか踏ん張っていた上半身を力任せに押し倒す。

「あっ……くふぅ。い、いやぁ、くはあ、く、くるし……はぅっ、んああ……っ！」

醜い巨体にのしかかられる嫌悪と圧迫感に、ユミエルは苦悶の声を上げた。だが、膿で濡れているイボイボが汗まみれの美肌を擦るたび、嫌悪感とともにまたしても女芯が火照

ってくる。苦痛と悦楽の入り混じった艶めかしい声に、蛙男は興奮の絶頂に達した。
「へ、へへへへへ！　お前ェ、可愛い顔してるなァ……いかにも純情ぶりやがってよぉ、ぐげげげぇ！　好みだぜェ、めちゃくちゃに汚してやりたくなるくらいになァ！」
大きく裂けたがま口が、涎を撒き散らしながら艶めかしい首筋を這っていく。小さな歯で少女の首筋を何度も噛みながら、生臭い口が聖女の清楚な顔に迫る。あまりのおぞましさに喉まで出かけた悲鳴を呑み込み、顔を反らせる変身ヒロイン。その顔を丸々食べるように、エクリプスは涎を零しながら頬にむしゃぶりついた。
「ひ、い！　や、やあ……やだぁ。や、やめてぇ……！」
最大まで開けられた蛙の口から長く太い舌が伸び、怯える少女の童顔を隅々までねぶり尽くしていく。野太い舌の先端部は亀頭じみた形状に膨らんでおり、鈴口さながらに開いた穴から膿のような白濁が溢れている。性病で膨れ上がった男根を思わせる肉棒が清楚な美貌を這いずり回り、粘っこい唾液を頬や唇に塗りつけていく。
「ふあぁっ……い、いやあぁ。顔……お、お顔は、いや……あぁ……！」
女の命をいいように陵辱される屈辱に、涙を零し懊悩する聖戦士。悔しさと同時に、マゾヒスティックな悦びが止められない。
（く……ダ、ダメ！　流されちゃダメよ、これが、最後のチャンスなんだから……あぁ！）
心の中で自分を鼓舞するも、その間にも舌の動きは激しくなるばかり。嫌悪と快感が一緒くたになったどろどろの感覚が聖天使の意思を蝕み、悩ましげな喘ぎを漏らさせる。

「あ、あふ……う。やは、やあぁ……ふぐ、あふうう〜！」
弱々しく首を振って拒絶するも、がっちりと組み敷かれてはエクリプスの舌をどうにかすることはできない。いまのユミエルにできるのは、しっかりと目を瞑り唇をきつく閉じて快感に気が飛んでしまわないように最後の理性にすがりつくことだけだった。
「ぐへえ……イ、イイぞぉ。その声、表情、この肉体。お前、す、すごくイイなあぁ！」
興奮して不愉快な叫びを上げるトードエクリプス。舌を伸ばしているので発音がしづらいのか、その声はいままで以上にくぐもっていた。大きな口を開くたびに白濁した涎が大量に零れ落ちて、正義のヒロインの顔面とコスチュームを容赦なく汚しまくる。
とりあえずは満足したのか、顔面に対する陵辱は一段落した。顔をねぶりまくっていたカエルの舌が信じられないほどに伸び、次なる個所へと向かっていく。激しく動く胸の谷間や、ボディスーツに浮き出した臍の穴にまでいやらしく涎をなすりつけながら、カエルの肉舌は少女の下半身へと迫っていた。
「ひひひ、どれぇ。小癪な女戦士サマのアソコはどんな具合なのかねえ……ぐひひ！」
蛙男の舌が器用にミニスカートをめくり上げると、甘ったるい牝の香りが漂った。肉舌がのたくり、汗と愛蜜で恥ずかしく濡れ返った下着を引き裂かんとする。が、変身少女の聖衣は神聖な力で守られており、下級なエクリプス如きの力では破ることはできなかった。
「ぬぐふうう……ちぃぃ、どうなってやがるぁ！」
短気なヒキガエルは自分の思い通りにならないことに憤慨し、めちゃくちゃに舌をショ

ーツに押しつけまくってきた。そのたびに歪んだり皺ができたりはするが、やはりシルク地の下着は破れない。だが、太い肉棒を股間部に擦りつけられる少女の反応は違っていた。

「あ、ああっふぅ……！　あ、やあ、やめっ……あふぅ、んんあ……っ！」

ショーツ越しとはいえ、熱い肉の塊が一番敏感な部分を激しく摩擦してくるのだ。組み敷かれた聖少女はもどかしげに足を蠢かし、股から駆け抜ける甘い毒に嬌声を上げている。

「あん？　へへへ、なるほどな。こいつはこいつで愉しめそうだぜ、ぐひひひ！」

恥ずかしい行為で少女が感じていることがわかり、トードエクリプスは下卑た笑みを浮かべた。そして、ショーツを引き裂くためでなく、天使を責めるために舌を激しく動かしていく。濡れた下着と涎が絡みあい、ぬちゃぬちゃといやらしい粘質の音が響く。

「んああっ……ひ、だめ、だめ！　そんなに……やぁ、こ、擦れ……ふひぃっ……！」

脈動する舌の感触が、ショーツ越しに生々しく感じられる。そして、熱く滾った肉の棒が、包皮を剥いて勃起しているクリトリスと激しく擦れあう。一番敏感な個所を汚らしい舌で弄りまくられ、少女は恥辱に顔を染めて悶えまくった。

（んんっ……あはぁ！　だ、だめぇ。こすってるぅ……お豆、こすれちゃってるぅ……！　あひぃ、だめぇっ！　お、お豆が熱くて……や、はぅぅぅん……っ！）

何度も何度も、執拗なまでに舌の責めは続く。往復のたびにユミエルの下腹部は燃え上がり、肉芽がすり潰されて鋭痛と同時に眩暈を起こしそうな快感が迸る。カエルの肉布団にのしかかられた聖女は、涎まみれの顔を反らせて必死に魔の快感を否定しようとした。

「あふっ、らめっ……らめえぇっ！　ひうぅっ……んあ、ひ、いい。いい……っ！」
だが、リズミカルに繰り返されるピストン運動のたびに甘い稲妻が下半身を打ち、汚された正義のヒロインはたまらず艶めかしい声を漏らしよがり悶えた。バケモノの舌を股で咥え込み、めちゃくちゃに擦り立てられて、それに感じまくってしまっている。屈辱と羞恥が戦士の心にのしかかり、マゾヒスティックな快感がさらに大きくなっていく。
「へへ、可愛い声で泣きやがる。そんなに素股が気持ちいいのかい、淫乱天使サマぁ？」
「そ、そんにぁ、は、はずかひ……ひぃ、あひいぃぃ、いぃぃ……っ！」
もう、まともに言葉を返すこともできない。身体中が燃えるように熱くなってきて、秘門は間断なく蠢いて恥ずかしい蜜の分泌が止まらない。肉棒を擦りつけられて、ショーツに染みた牝蜜は泡立ってきつい性臭を放っていた。
天使を責めるカエルの舌全体がビクビクと震えている。異形の舌は人間をやめた醜い怪物にとって男性器の役割も果たす。生命を宿らせるためでなく、ただ女性を犯すためだけの肉棒舌だ。先端の穴からはトロトロと先走りの液が漏れ出てきている。射精寸前の快感を味わい尽くそうと、トードエクリプスは舌の動きをより一層激しくした。
「あ、あひ！　ふあぁ……ら、らめぇっ！　し、舌、激しすぎ……はぅぅ、くふうっ！」
蛙男のパワーストロークに、どうしようもなく感じまくる変身天使。潤みきった秘裂からは止めどなく恥液が流れまくり、それが肉舌と絡みついて滑りをよくし、粘膜が擦れてさらなる悦楽を喚起する。股を嬲られる聖少女は、涙を流し金髪を振り乱して悩乱した。

『第五章　仮面の奥に潜むモノ』より

円形に大きくカットされた胸元から覗く双丘はFカップはあろうかという巨乳で、二つの熟れきった果実が織り成す肉の谷間を惜しげもなく晒している。豊満なバストから腰へと続くラインは触っただけで折れてしまうのではないかと思えるほどに細く、そこからむっちりと肉の詰まった臀部にかけてまた急激に肉質を増し艶麗に膨らんでいる。あまりにも豊潤で官能的な肉体美。いかな聖人君子といえど欲情せずにはいられない、媚肉の魅力に満ち満ちた魔の女体だ。

また、イビルアイを名乗っていた魔人に相応しい数々の装身具が麗しい容姿に妖美なアクセントを加えていた。眼球の刻印が為されたきらびやかなアクセサリの数々がその身を覆っているのだ。そのどれもが生きているかのように生々しくリアルで、人の不幸を覗き見て愉悦にひたるエクリプスの異常性を暗に示しているようだった。

「見なさいユミエル……これが、わたしの真の姿。全知全能なる神の瞳を戴く邪眼の支配者……ヴジャドエクリプス！」

白い美貌の額に闇が集中し、邪悪な意匠のサークレットが形成される。中央には赤く染まった丸い宝石が煌々と輝いていた。その位置と形状は、数々の神話伝承にその存在をほのめかす、魔力を秘めた第三の目を思わせる。

垂れていた長い前髪は目玉つきの髪飾りによって掻き上げられ、エクリプスの素顔が露わに晒される。新野瞳と同じ顔貌（かんぼう）でありながら、もはや別人と呼ぶ他ない悪魔の器量。吊り上がった鋭い目は圧倒的な自信に満ち溢れ、自分以外のすべてを蔑む傲岸不遜な光が潜

む。紫色に染まった唇は誘うように濡れて不敵な笑みを湛えていた。
「新野さん……！」
哀しく寂しい少女の中に潜み、おぞましき胎動を続けていた欲望と嫉妬と絶望の影が満開した毒華――邪眼の魔姫ヴジャドエクリプスは、狂気を孕んだ声で叫んだ。
「許さない……羽連悠美ッ！　なにが天使だ、なにがみんなの幸せを守るだ。わたしの唯一の幸せを奪って！　たっぷりと償わせてやる。この、ヴジャドエクリプスの力で！」
闇を引き裂き、黒衣の腰回りから生えていた羽飾りが大きく広がった。孔雀の尾羽のように扇状に展開した極彩色の翼の中に無数の目玉模様が浮かび上がり、ぎょろりと開いたそれらが一斉に血の涙を零す。
それは異様な光景であった。長く垂れ落ちる赤い涙が、粘性を帯びて蛇のように起き上がったのだ。血の涙は見る間に凝結し、赤く濡れ光る血管じみたグロテスクな触手へと変じた。魔眼より生じた血涙触手が、猛然たる速度でユミエルに襲いかかる。
「……くっ！」
迫りくる異形に、咄嗟に剣を構え直すユミエル。残光とともに十字剣が薙ぎ払われ、何本かの肉蛇が切断される。だが、先端を切断されても赤い蛇は動きを止めず、切り口から粘液を噴出しながらも向かってくる。不気味なタフネスに女戦士は咄嗟の判断で後ろに跳躍し、すんでのところで追撃を回避する。
バキバキと硬いものが砕ける音が響いた。攻撃を外した触手がそのまま地面にのめり込

み、コンクリートの床を軽々とぶち抜いたのだ。恐るべき怪力を秘め無限に再生する血色の触手を手足の如く自在に操るヴジャドエクリプス。それだけで、彼女の影魔としての能力がどれほど強大かわかるというものだ。

だが、ユミエルが圧されている理由はそれだけではなかった。

「くくく、さっきまでの勢いはどうしたの、幸せを守るヒロインさん？　本気を出しなさいよ。わたしを倒すんでしょ……そうやって、またわたしから恵理子を奪っていくんでしょ！　ふふ、短い付きあいだったけど……わたしたち友達だったのにねっ！」

狂気を露わにした魔姫の声に、宙を舞う天使の身体が微かに震えた。胸の奥を冷たい針で刺されたような、小さく鋭い痛みが走る。

（ダメ……し、集中するのよ悠美。わたしは、エクリプスを……！）

ユミエルは心の中で唱えた。相手はエクリプス、自分は光翼天使。目の前の魔人は、人々から幸せを奪う、倒すべき邪悪な怪物。

だが、新野瞳の寂しげな表情と、恵理子と一緒にいるときに浮かべていた喜色とが、どうしても脳裏から離れない。それに、奥手な自分と冷たい美少女との暖かいやりとりも。

（でも……。し、新野さん……わたし……！）

幾つもの想いが絡みつき天使の動きを束縛する。戦士に許されない優しい甘さが、ユミエルの動きから精彩を奪っていた。攻撃の手が緩み、どうしても防戦に回ってしまう。

「へえ、よく避けるじゃない。どうやら天使様はダンスがお得意みたいね。ふふっ、じゃ

あ、こんなのはどう……？」
いやらしい笑みを浮かべていたヴジャドエクリプスの額で丸い宝石が輝いた。神々しくも禍々しい黄金の光が屋上すべてを照らす。不死身の触手を凌ぐので精いっぱいだったユミエルに、その光を避けることはできなかった。
トードエクリプス戦で受けた呪縛邪眼のような直接的なダメージはない。しかし、黄金の邪視の効果はすぐに現れた。
「う……くぅ。あ、あぁ……っ？」
どこまでも追ってくる触手群の波状攻撃を辛くも回避していた少女戦士に乱れが生じていた。動作の一つ一つに力がこもっておらず、覚束ない調子でよろめいてしまう。緊張に引き締まっていた表情は薄い朱色に染まり、玉のような汗が額から噴出していた。
（な、なに……？　か、からだが……ああっ……！　あ、熱い……っ！）
全身が燃えるように火照ってきて、熱くて熱くて仕方がない。お腹の奥からは得体の知れない疼きが広がり、それをどうやっても抑えられない。身体中から滝のように汗が流れ、麗美なヒロインのコスチュームが肌に吸いついてくる。それがまた新たな刺激となり、いまの変身少女には湿った唇に舐められているように感じられてしまう。
（な、なにこれ……⁉　な、なにもされてないのに……こ、こんなの、おかしい……っ！）
はぁっ、と可愛らしい唇から艶めかしい吐息が零れた。黒々とした戦士の目は潤み出し、無意識のうちに太ももを内股気味に擦りあわせるようにしてしまっている。乳首は勝手に

勃ち始め、白いショーツの下では肉唇がむずむずと疼いてくる。
ヴジャドエクリプスの魔眼が放った金色の視線は、牝を酔わせ肉を狂わせる催淫邪眼だったのだ。それを全身に浴びたユミエルの肉体は、どんなに小さな刺激でも敏感に感じ取ってしまう淫らな性感帯と化してしまっていた。
「あくっ……ふ、はう……っ！」
触手の攻撃を回避するたび、全身に刺すような電撃が走り抜ける。影魔との戦闘はこれ以上ないほど激しい全身運動だ。少し身体を動かすだけでも敏感に感じてしまうというのに、うねくる無数の触手どもを相手に立ち回り、少女の肉体は加速度的に燃え上がっていった。だが、そんなことにはお構いなく、触手どもは次々と天使に襲いかかってくる。大群に追われ身体を動かすたびに、密着したコスチュームと鋭敏になっている肌とが擦れあい、甘美な刺激に意識が乱れてしまう。
「うあっ。ひ……んふあぁぁ――っ！」
剣を大きく振り下ろし迫る蛇の一匹を切断した瞬間、ボディスーツを突き上げて陰影を形作るほどに勃起した乳頭と、ケープを留めている十字架のアクセサリが強く擦れあい、ユミエルは艶めかしい嬌声を漏らしてしまった。
「くくく、どうしたの悠美？　戦いの最中だっていうのに、変な声上げて。ふふふっ、そんな足取りで、これが避けられるかしらね……!?」
惑乱する天使を追走する触手の動きがさらにスピードを増した。パワーに任せ闇雲に攻

撃するのではなく、行動を予測し数本の触手が連携して、獲物を着実に追い詰めていく。
ヴジャドエクリプスはいままで本気を出してはいなかったのだ。長い間虐げられる立場にいた少女は誰よりも知っている。いきなり圧倒的な力で打ちのめすよりも、抵抗できるかできないかくらいのところで加減して弄び、そのあとで力量差を見せつけてじっくりと嬲るほうが、より大きな絶望を与えることができるということを。
「くっ……や、はふうっ！　ひあぁぁ、そ、そこ……おぉっ」
淫らに発情させられ、スピードを殺された天使のミニスカートを血の触手が掠める。あくまで掠っただけで、ダメージはない。だが、スカートの上から熱くなってきている秘部にほんの少しだけ触られただけでも、ユミエルはたまらず濡れた声を漏らしてしまう。知らない間に疼く股間に意識がいってしまい、一瞬天使の動きが止まった。
「ひぃんっ……あ、あ！　し、しまっ……！」
一斉に襲いかかる触手の群れ。エナメル質にてかるロンググラブや、汗に濡れて光る白いニーソックスに絡みついて自由を奪う。必死に剣を振るってもがく少女戦士だったが、あっという間に幾重にも四肢に巻きつかれ、凄まじい力で両手と両足を限界まで広げられる。そのまま触手が引っ張られ、天使は身体を大の字にされて宙に浮かされてしまった。
赤蛇の大群に搦め取られた聖女の姿は、邪神に捧げられる聖なる生け贄を思わせる。
「ふふっ、捕まえた。さて、今度は触手たちをエスコートして踊ってもらおうかしら……肉欲の泥沼に堕ちて這い上がれなくなるまでね、あはははは！」

ユミエルの腕と足を拘束している触手は十本程度、血涙触手はまだ無数に残っている。粘液で照り返る触手どもが、吊り上げられた変身少女の肢体に容赦なく絡みついていく。

「く、あっ……やあぁ、こないで……っ！」

（だ、だめっ！　こ、こんなに敏感になってるところ、直接責められたら……！）

怖いくらいに敏感になってしまっている肉体を嬲られる恐怖に、さしもの女戦士も怯えた声を上げる。無論、それは嫉妬に狂う魔姫の嗜虐心を満足させるだけで終わった。

数本の赤い紐が乱れたケープの下側から入り込み、黒いボディスーツの上から美乳の外輪にとぐろを巻いて絡みついた。お椀型に整ったCカップの乳房が力任せに絞り上げられ円錐状に盛り上がる。小山の外側から頂上へ向けて乳を搾るように触手が蠢くと、そのたびに肌着と密着した柔肉に触手がめり込み、頂点でつんと張っている乳首が淫らに震えた。

「あひっ……あ、ああっ……ひぅあ～っ！」

きつく押し潰された両乳から走りくる強烈な快美感に、たまらず悶える緊縛の聖女。

触手どもは下半身にも侵略の手を伸ばしていった。白いミニスカートのスリットを押し広げ恥液で染みているショーツに集まり、丸みのある臀部から太ももにまで触手が複雑に絡みつき締め上げる。艶めかしい朱色に染まっているもも肉は、触手に縛られハムみたいにはみ出ていた。深く食い込んでいる触手が音を立てて蠕動すると、敏感に火照っている肉が擦られて、えも言われぬ気持ちよさが駆け上がってくる。

「うああ、あっ、ひあああああ――――！」

むにゅ、むにゅむにゅむにゅ！　乳と脚を同時に、力任せに扱くように揉みしだかれる。ユミエルは全身を小刻みに痙攣させ、意識を吹き飛ばさんばかりの快感に悶え狂った。

（こ、こんな……うふぁぁっ！　お、おっぱいがぁ……ひいぃ！　すごい……敏感すぎるの。お、おしりもぉ……かっ、感じすぎちゃうぅ……！）

催淫視線の効果を受けた肉体の敏感さは、聖天使の予想を遥かに超えていた。極限まで鋭敏になっている発情ボディは撫でられただけでガクガクと大きく震え、どっと汗が噴出してくる。光り輝く翼までもがせわしなく揺れ、まるで快感に打ち震えているようだ。

汗と粘液とでぬめり、ローションを塗りたくられたように照り返る媚肉を触手どもが容赦なく蹂躙する。粘着質ないやらしい音を立て、美乳と太ももの肉をつまみ嬲りながら何度も何度もロープが往復する。

「いひぃ、ひっ、ひっ……にぁ、くひいい～！」

自分のものとは思えないくらい敏感になっている肉体を嬲られ、聖女は激しく髪を振り乱しながら悩乱する。いままで味わったことも、いや考えたことすらない想像を絶するほどの快楽責め。しかもこれはエクリプスの責めの序盤にすぎない。

乳肉や太ももを揉みほぐされただけでこうなのだ。容赦なく乳首を舐められ秘裂を穿たれたならば一体どうなってしまうのだろうか？　少し思い浮かべただけで、絶望的な恐怖と、その先にあるゾクゾクするほどの快楽の予感とにユミエルは力なく顔を振った。

（うあっ……ダ、ダメぇ。そんなっ……そんなことされちゃったら、わたし、もう……！）

考えただけで、マゾヒスティックな愉悦が止まらない。四肢を広げられ束縛された聖天使は、いつの間にか自ら悩ましく身体をくねらせ、空腰を使って悶えてしまっていた。

若く瑞々しい肉体は、幾多の戦いの中で様々な影魔に何度も陵辱されたっぷりと開発されてしまっている。悔しくても恥ずかしくても、快感をいかに貪るかを知り尽くしている牝の肉体は淫らな動きを続けてしまうのだ。羞恥と快感に涙しながらも、少女は肉欲のうねりにはまり込んでしまっていた。清楚な童顔は、淫靡に発情して赤く染まっている。

「ふぅん。流石、ずっと欲望の塊の相手をしてきただけのことはあるわね。やらしく悶えて腰を振っちゃって……快感慣れしてる。くく、エッチな正義のヒロインもいたものね」

しばらく目だけで女戦士の痴態を楽しんでいたヴジャドエクリプスだったが、やがて触手どもに新たな命令を発した。

最初にユミエルに巻きつき手枷と足枷の役割を果たしている触手以外は、粘っこく糸を引きながらも天使の肢体から離れていった。束縛から解放された聖女の両乳は快感の余韻に大きく上下し、黒い肌着は濡れまくって一分の隙もなく肌とくっついている。粘着質の液体で濡らし尽くされた太ももには、きつく締め上げられた痕が赤く刻まれていた。

「う……あ。は、あ……あぁっ」

責めから解放され、涙ながらに荒い息をつく少女戦士。だが、肉体と精神を苛み続ける快感地獄から解放されたわけではない。愛撫の最中で放り出されたことで身体はさらに切なく疼き始め、扇情の炎はむしろより勢いを増してしまっていた。陵辱から解放されたの

ではなく、生殺しに等しい状態にされたのだ。
「は……くうぅ。はあぁ、ひぃ……ん、やぁ、ど、どうして……くふぅ、うぅっ！」
歯を食いしばって絡みつく快感を必死に振り払おうと試みるが、しかし一度泥沼に落ち込んだ肉体は全然言うことを聞いてくれない。疼きは収まるどころかますます強くなり、焦燥感に駆られて余計に感じやすくなってしまっているようだ。
「へえ、こうして見るとなかなか可愛いわね。くくっ……たっぷり、泣かしてあげる」
ヴジャドエクリプスは触手を動かし、悶える少女の肉体を自分の目の前まで持ってこさせた。発情した牝の甘酸っぱい体臭を存分に味わいながら、汗と粘液にまみれ桃色に染まっている若い肢体をじっくりと視姦する。細い吊り目を真円にまで見開き、蛇のように舌なめずりする影魔の少女。新野瞳の欲望そのままに、恥辱と屈辱にまみれた女の痴態を視線で貪り喰らっているのだ。
仮面に一撃を喰らわせた忌々しいバトルブーツから、濡れ返った白いニーソックスが密着した肉感的な太ももへ、そしてその先にある愛蜜でべちゃべちゃになっている純白のショーツへ、エクリプス本来の欲情に燃える視線が若い肉体を舐めながら移動していく。
「見れば見るほどエッチな身体ね。もっとよく見せてもらいましょうか……ふふふ」
エクリプスは股間部分をじっくりと視姦するために大股を割らせようと、天使の両足を束縛する触手に思いきり力をかけた。
「あ……や、やあぁ。やめ……やめてぇ……っ！」

『第六章　聖少女の受難』より

（ああっ……す、すごい。ま、まだ、こんなにたくさん、残ってるんだ……）
まだ数人しか相手していないのに、指の関節が段々軋んできて、摩擦によって掌も痛くなってくる。どれだけ扱いてもキリがない――終わらない指奉仕に疲弊の色を隠せない転校生に、ポニーテールの女友達がまたしても適切かつ羞恥に満ちた助言を下す。
「悠美、手よりもいいトコあるでしょ？　おくちでちんぽしゃぶってあげなさいよ」
献身的な聖少女の動きが一瞬凍りつく。悠美も、その選択は考慮していなかったわけではない。しかし、それは彼女にとってあまりにも屈辱的な最後の手段だった。
「え……あ、あ。そ、そんな……っ！」
汗と精液と涙にまみれ憔悴しきった少女の幼顔。黒く輝く瞳が、少しずつ濁っていく。
蒸すように熱い室内には男の精臭が充満し、両手を激しく動かす少女は酸欠気味だ。加えて無数の欲情視線に打ち抜かれ、淫猥な行為に疲れ果て、正常な思考は蝕まれている。
（お、おくちにいれるなんて……。でも、早く終わらせたい……あん、おくちぃ……）
同じことしか考えられなくなった悠美の眼前、手頃なペニスが左右に揺れている。まるで咥えてくれと誘っているようだ。意識しないように目をそらしても、映るのは腹をすかし猛る肉蛇の頭のみ。水着少女の周りは文字通り肉の壁で覆われ、逃げ場はどこにもない。
しかも恵理子の言葉に踊らされたか、男子たちの欲情はさらに滾り、淫らな期待に光る目で転校生をじっと見ている。顔のすぐ側まで無遠慮に迫ってくる亀頭もあった。
「は、羽連ちゃん……あ、あのさ。その可愛いお口で、してくれるのか……？」

「え、あ……や、ああっ」
混濁する悠美の思考に、誰とも知れない恥知らずな男の声がとどめを刺した。
「あ、あぁんっ。そんなこと、言わせないでぇ……。あっ、ああ……んむっ……！」
思考がどろどろに溶けて、もう自分でもなにがなんだかわからない。言葉とは裏腹に、半ば無意識のうちに悠美の口は行動に出ていた。
「はむぅ……ん、ちゅ、じゅる……！」
悩乱したスクール水着美少女は、ぱくり、とフランクフルトの一本にかぶりついた。
「う、うおぉっ⁉」
肉棒の持ち主が素っ頓狂な声を上げた。突然、転校生が自分の一物に舌を絡めてきたのだ。そして、そのまま小さな唇を必死に開いて己の分身を呑み込んでいる。
もっとも、悠美の小さく可愛らしいお口ではいきり立ったペニスを完全に収納することはできない。それでも唇を窄めて必死で吸引し、先端から半分以上を一気に呑み込んだ。
「んむっ……んふっ、むうう……！」
（あ、ああっ。おちんちん、お口でしゃぶっちゃってる……うあ、太くて、すごい……）
清楚な顔を赤らめ、咥えた竿を一心不乱に舐めまくる美少女。技術もなにもあったものではないが、唾液でいっぱいの口内は、滑らかな掌とはまた違った極上の味わいがあった。桜色に濡れた唇の肉は柔らかく、湿った感触が竿に絡みつきなんとも気持ちいい。入り口の柔軟さとは対照的に口腔内は狭隘（きょうあい）で、まるで締まりのいい名器にきつく搦め取られてい

るかのようだ。懸命に亀頭冠に巻きついてくるたどたどしい舌使いもこそばゆくて心地よい。それになにより、ユリの花のように清純な少女が汚らしい肉棒を咥え込む様は、視覚的にたまらなく背徳的かつ扇情的で、牡の征服欲を最大限に刺激する。

女神のくちづけに選ばれた少年は初めこそ困惑したものの、たおやかな華を思いきり踏み躙るような嗜虐的な快楽へ一気にはまり込んでいった。

「う……おおっ、すげぇ！　くぅ、悠美ちゃんって、ホントにエッチなんだな……」

「ふむうっ……うふう、うむぅうん……っ！」

心ない言葉に恥辱の涙を零す純情な少女。が、フェラチオをしていては言葉を返すことはできない。いまの悠美にできるのは、一刻も早くこの爛れた行為を終わらせるために、ひたすらお口で肉茎を舐めしゃぶり、両手で男根を掴み扱くことだけだった。

「羽連さん……本気になってるぜ。可愛い顔して、すげぇよな……」

「あ、ああ。ううっ、俺もしゃぶってもらいてぇ……！」

汗と涙と精液にまみれた美少女の痴態に、牡獣どもの熱情はさらに滾った。欲望視線はより熱く鋭くなり、情け容赦ない嘲弄には、痴女を責め嬲るような調子さえ含んでいた。

（ち、違うの！　ただ、これは仕方なくて……ああ！　み、見ないで。やああ……そんな、そんな蔑むような目で、わたしを見ないでぇ……っ！）

報われない恥辱行為に絶望する献身の聖少女。だが、それを終わらせるためにはさらに奉仕を続けなければならない――どうしようもない悪循環に、目の前が真っ暗になってく

る。それでも水着姿の少女は献身的にペニスを舐めまくり、一生懸命に指を動かし続けた。
「んむぅっ。んく、くふうっ……ふう……う」
心も身体も疲れ果て、少女の動きが鈍くなる。肉棒を扱き立てるペースが落ち、疲れた舌の動きがおろそかになる。口の中全体が痛く、ゆっくりとしか動かせない。
と、涙を流し屈辱に悶えていた悠美の頭が、突然ごつい両手に掴まれた。
「あれ、終わりにはちょっと早すぎるんじゃないかな。俺、まだイッてないよ。でも、悠美ちゃんも疲れただろうから……俺、自分でするよ！」
言うや、男は思いきり腰を前後させてきた。硬く熱い肉の槍が、小さなお口の中を縦横無尽に暴れ回る。舌の上や頬肉を擦りまくり、喉の奥にまで達するほどのストロークが、何度も何度も口の中に炸裂する。
「んぐっ……！　ふう、ふぐうう～！」
言葉とは裏腹に、少女を気遣う様子などまるでない暴力的なイラマチオに、たまらずくぐもった悲鳴を上げるスクール水着の転校生。突かれた内頬や喉舌がじんじんと痛み、お口を封鎖されているせいでろくに息もできずに顔が真っ赤に染まってくる。滲み出てくる嫌な汗は涙と混じりあい、清楚な顔を艶めかしく輝かせている。
（い、いや……やあぁ――っ！　お口、そ、そんなに激しくしないでぇ……っ！）
疲労困憊の悠美のことなどまるでお構いなしに、力任せの口姦は延々と続いた。快楽を得るためだけの激しすぎる運動に、もとからはちきれそうだったペニスは急速に絶頂へと

向かっていく。流れ出す先走りの粘液で口の中はすでにドロドロだ。
（あ、あああっ……。お、おくちの中……いやあぁ。どろどろしたみるくで、い、いっぱい……。太いの……おちんちん、どんどんおっきくなってるよぉ……）
お口の中で異様なほどに大きく脈動する肉蛇に、水着姿の転校生は戦慄（わなな）き頭を振った。だが、男の両腕で頭を押さえられ、羞恥と疲労で力のこもらない少女は逃げられない。
「ううっ……で、出るよ羽連ちゃん。飲んで……全部、飲み干してくれぇ！」
どぶっ！　どぶどぶどぶどぶ！　男の侵略運動がピークに達し、白く熱い液体が口の中に吐き出される。
「んぐ……は、あああっ！　ふあああぁ、い、いっぱひ……んむ、んむうう〜っ！」
どぼどぼと注がれる精液の凄まじい勢いに、狭い口の中はすぐにいっぱいに満たされてしまった。それでも力強い射精はやむところを知らない。欲液の発射口は喉の深い部分まで達しており、頭をガッシリと固定され少しも動けない少女は、自然とそのまま大量の濃縮ミルクを飲み干すことになってしまう。こくり、と喉が艶めかしく蠢いた。
（んああ……ああ！　い、いっぱい出てる……男の人の……あ、熱くて、ネバネバしたみるくが、いっぱい。それを……あ、ああ。わたし、男の人のを、飲んでるんだ……）
涙ながらに蛋白液を飲み続ける悠美の唇から、飲みきれなかった精液がゴポゴポと音を立てて逆流していく。粘り気の強い白濁液はゆっくりと顎を伝わりスクール水着を白く汚し、牡の臭いをあどけない少女の身体中に染みつかせた。

「ああ……は、はあ。はあ……あぶふぅっ……！」
ようやくすべてを出し終えた肉棒が引き抜かれ、両手の拘束から解放されると、ねとつく液体を付着させた少女は荒い息をつき頭を垂れた。心も身体も、もう限界だった。
「あー、お前いいなあ！　じゃあさ悠美ちゃん、俺もお口でお願いできるかな？」
しかし、恥辱の連鎖は始まったばかりだ。聳え立つ肉の塔はまだまだ幾らでも残っている。フェラチオ奉仕の疲労と口内射精のショックで言葉も出せない聖女の眼前に、すぐさまおかわりのアイスキャンディーが差し出された。
「あ……う、はぁ。す、少し……待って、くだ……あ、やあう……っ！」
怯えた悲鳴を上げる傷心の転校生。我慢できなくなった少年が、悠美の右頬にペニスを擦りつけたのだ。桃色に染まった豊頬はスポンジみたいに柔らかく、やんわりとへこんで剛直を優しく包み込む。肉棒の持ち主は年頃の少女の初々しい肌触りに興奮し、何度も何度も己が一物を頬肉に擦りつけて柔軟な感触を愉しんだ。
「あ……だ、だめぇ……。ほ、ほっぺは……ひ、あぁっ！　あむ、むうぅ……っ！」
横っ面を擦られ悶える少女の口唇を無理矢理に割って、別の熱棒が口の中に突っ込まれた。今度のペニスはあまり太くはないが、かなりの長さを誇っている。いきなり全力で挿入された肉長槍は、献身的な転校生の喉奥にまではまり込んだ。
「ひあぁっ、おくひっ、またお口なんて……はむっ、んむ、くふうぅ……っ！」
吐き出したくても吐き出せない。飲み残したヨーグルトでねちゃねちゃの口腔内を擦ら

れ、亀頭冠が喉をつつく。奥まで蹂躙され、悠美は吐き気を催し呻き声を上げた。
「てめえっ、順番無視すんじゃねえよ！　俺が先だったろうがっ！」
「へっ、お前はほっぺがあるだろうよ。さあ悠美ちゃん、舌で舐めてよ……優しくね」
「んむ、ふむぅ……。は、はひ……れろ、ちゅるっ」
ルール違反の男子学生の言葉に従い、少女は未だスペルマの付着したままの舌で肉棒に奉仕を始めた。震える舌の先っちょで肉頭を擦り、牡茎の裏側を舐めながら少しずつ下のほうへ線を引いていく。疲れきった転校生の舌技は弱々しく頼りないが、それでも健気に肉棒をしゃぶり続ける悠美のフェラチオは少年の分身を大いに悦ばせた。
「ちっ、まあいい。じゃ、俺はこのまま柔らかいほっぺでイカせてもらうとするか……！」
頬を嬲っていた男子学生は苛立たしげに吐き捨て、本腰を入れて右頬にペニスを擦りつけ始めた。カウパー腺液で濡れた肉冠が柔肌を這いずり回り、照り返る粘液がたっぷりと豊頬に塗りたくられる。何度か擦られているうちに、頬肉の柔軟な感触に満悦した肉蛇が大きく脈打ち始めた。口の中からも外からも責め立てられている美少女は、またしても顔面に白濁を発射される恐怖と屈辱に涙を流し弱々しく頭を振った。
「ひゃふむ……ひ、ひゃぐぅぅ……。ほ、ほっへは、ゆるひて……ひ、ひふゃあっ！」
どびゅっ！　びゅびゅびゅるる……。
泡立つ陵辱の証が転校生の横っ面にぶちまけられた。可憐な顔の右側は腐汁で犯し尽くされ、白い飛沫は首やリボンにまでかかっている。射精を終えても、柔らかい頬肉の感触

に陶酔している少年は腰を振り続け、自身の精液を顔中に塗りたくった。大量の白濁を浴びせられた悠美の顔には、痛ましくも凄艶な色気が漂っている。

「んふあ、あ、ふあああ。やぁ、ま、またぁ……こんなに、い、いっぱひ……ぃぃ」

可愛らしい顔を再び汚され、ぽろぽろと恥辱の涙を零す憐れな殉教者。流れる滴が頬にへばりついた粘液と混じりあい、そのまま水着へと垂れ落ちていく。

すると、今度は右手に突然なにかが触れた。無骨な男の掌が、繊細な少女の右手を上から包むように掴んだのだ。爆発寸前の肉棒を咥えたまま、目線だけをそちらに向かわせる悠美。手を掴んでいたのは、右手で奉仕していたペニスの持ち主だった。

「なあ、こっちも扱いてイカせてくれよ悠美ちゃん。これじゃ不平等じゃないかよ」

勝手な不平を零す少年は、ごつい両手で転校生の繊細な手を握り締め、自分の分身をしっかりと握らせる。そして、そのまま腕を前後させて自分の分身をごしごしと擦りつけた。

ぬぷぬぷぬちゅ……。濡れた肉同士が高速で擦りあわされ、淫靡な粘着音が響く。粘液でねっとりと濡れ、羞恥と興奮で温まった掌の柔らかい肉は、少年にとって最高のオナホールと化していた。美少女の繊細な右掌を、欲望を満たすための単なる道具として容赦なく使用する少年。下半身に迸る快感に突き動かされ、より動きを激しくさせていく。

「ひゃ、ひゃめぇ！　ひ、ひっかり、しまふからぁ……やはぁ、やめてくらはひぃ……」

あまりに激しい摩擦運動に、掌が火傷しそうなほどに熱くなってくる。恐怖に駆られた悠美は怯えた声で懇願し、贅沢な男子を満足させるべく自分から指を動かし始めた。痛み

と衝撃に震える五本の指になんとか力を込め、順番に動かして熱く滾る肉根を掴み締め上げる。まるで縦笛を演奏するように、転校生はしなやかな指をせわしなく動かし続けた。
「こっちも頼むぜ羽連さん。握ってるだけじゃ、いつまでたってもイケねえからよ！」
またしても厳しい注文が飛ぶ。肉奉仕に慣れない少女には、お口と両手を同時に動かすことができない。どこかの動きに集中すると、他の個所がおろそかになってしまうのだ。
いつまでたっても慰めてくれない転校生に、左側の男子は痺れを切らし怒っていた。やり場のない欲望をぶちまけるが如く、獣のように思いきり腰を打ちつける。暴れる肉根は羞恥と疲労で握りが甘くなっていた掌をすり抜け、水着のバストに亀頭がぶつかった。
「んあふぅ……っ！　あみゅぅ、はひゅふぅ……っ！」
刹那、口をいっぱいにされている悠美は、空気を漏らして甘い嬌声を上げた。羞恥と興奮で勃ちまくって水着の生地を押し上げている乳首に、粘っこく濡れた熱肉塊が触れてしまったのだ。胸乳の先っちょでめくるめくピンクの稲妻が駆け巡る。
（んあ、あっあぁあ！　ち、乳首ぃ……き、気持ちいい……気持ちいいよぉ……！）
疲れきった肉体、フェラチオによる酸欠。下卑た視線、むせ返る牡の体臭と精液の栗花臭。羞恥と屈辱にまみれ、性の監獄に閉じ込められた聖女はまともな判断力を失いかけていた。ただ一方的に提供するだけの肉奉仕が続く中、突然に甘美な毒が与えられたのだ。
（あ……ち、乳首、いい。わ、わたしも……。わたしも、気持ちよくなりたい……）
悠美の中で理性がどんどんと蕩け、代わりに快感を求める貪欲な牝獣が目を覚ます。

「ひ、ひはふぅ……。むねへ、ひはふ……。お、おっぱひでぇ、させへくらはひ……！」
僅かばかりの切ない快美感に踊らされ、自ら恥辱に満ちた行為へと溺れていく聖少女。ひくつくペニスを掴み取り、突っ張った肉果実に男根の射精口を強く押しつけた。そして、ぬめる肉頭で水着の膨らみをマッサージするようにごりごりと擦りまくる。
「う、うおお⁉　き、気持ちいい……すげっ、たまらねぇ……！」
未発達な少女のおっぱいはプリンのように柔らかく、汗と精液にまみれた水着越しでも、その素晴らしい感触は少しも損なわれることはない。そして、潰れそうな柔らかさの中で勃起した肉蕾の硬さがアクセントとなり、恐ろしいまでの快感がペニスから駆け抜ける。少年の不満はおつりがくるくらいに一気に解消した。
そして、それは自ら快楽への道を選んだ水着姿の少女とて同じことだった。
「ひゃふう、ふみゅうう……ふむっ、ちふび、いひのぉ……ふああぁあうぅ……っ！」
痛いくらいに充血した豆粒と、先走りでぬめつく肉塊が擦れあい、切なく甘い痺れが胸乳全体に広がっていく。亀頭の不定期な脈動や火傷しそうな熱さも、水着を通して敏感な果実に伝わり、狂おしい快美感と化して聖少女を惑乱させる。悦楽に蕩けた表情で、水着姿の転校生は肉棒を胸に押しあて続けた。
（いいっ、いい……っ！　乳首が擦れて……あんっ、おちんちんが、熱くてぇ……。ふわぁ、すごいの……。おくちも、お手手も……すごく、いいよぉ……っ！）
コリコリと乳首をいじめ、恥辱に満ちた行為に耽溺していく転校生。右手とお口の奉仕

にも自然と熱が入り、いやらしい摩擦音がどんどん大きくなっていく。羞恥と嫌悪に涙していた瞳は、いつの間にか被虐的な快感に溺れる牝のものへとなっていた。スクール水着の股布は恥ずかしい蜜でぐっちゃりと濡れ、きつい牡臭の中に甘ったるい牝花の香りが漂い始めている。

「くううう……で、出る。飲んでよ……零さずに飲むんだ！」

口内を占有していた男子学生が、突然激しさを増した少女の舌によって絶頂を迎えた。またしても喉の奥に流し込まれる汚辱の白濁。悠美はこくこくと喉を上下させて、精液を嚥下し続けた。今度のミルクは粘り気が少なくて幾分飲みやすかったが、やはり放出液は少女の小さな口の中には収まりきらず、飲み零した半透明の液体が喉を伝わり水着を汚す。

「うぶふ、す、すごっ……い、いっぱいれ……んむぅう、ぷはっ！」

小さなおちょぼ口から、濡れ返った肉棒が引き抜かれていく。栓の役割をしていたペニスが引き抜かれたので、小さなお口から飲みきれなかった原液が涎のように流れ出た。むせ返るような栗の香りが鼻腔と口内粘膜を刺激する。

「あ、ああ……ふう、はあぁ……んあっ」

悠美は陶酔した甘え声を出した。おぞましい牡の臭いさえ、心地よく感じてしまっている自分がいる。聖少女は自己嫌悪と、それを上回る官能の渦に呑み込まれ、両手の動きをさらに激しくさせた。左だけでなく右手で扱いていたペニスまでもおっぱいに押しつけ、ぐりぐりと円運動を描きながら敏感な肉豆を擦りまくる。

「お、おいおい、大丈夫かよ悠美ちゃん？　まさか、プッツンしちまったのか？」
乱れ狂う転校生の姿に、いままで口腔を嬲っていた少年が心苦しそうに聞いた。
「や……やぁ。でも……らめぇ。お、おっぱい、気持ちよくてぇ……らめなのぉ……っ！」
破廉恥な行為を指摘され、悠美ははっと顔を下向けたが、しかし両乳から送られてくる心地よさには逆らえない。顔を真っ赤にしたまま、肉棒で双丘を思いきり擦り続ける。
「すげえな悠美ちゃん。あんなに激しくおっぱいで擦って……そんなに気持ちいいのかな」
「わかんねえけど……へ、マジですごいぜ、くぅ、可愛い顔して、たまらねぇよな……！」
「ああ……。本当に、エッチな子だよな……ああ、我慢できねえ……っ！」
卑猥な野次が飛び、下卑た視線がスクール水着に突き刺さる。
恥辱奉仕を続ける少女の内心を知るものなど、誰もいないだろう。悠美は真面目で責任感の強い女の子だから――こんな行為に溺れるしかないのだ。悠美は、優しい天使だから。
（わ、わたし、なんてはしたないの……。で、でも……仕方ないの。だって、こうでもしなきゃ……はぁあ！　ち、乳首がぁ……ああっ！　わたしぃ……だめなのぉ！）
心の中で恥知らずな自分を責めるものの、それすらも被虐的な官能の呼び水と化してしまう。少女はだらしなく開いた口から飲み残しの原液を零しながら、必死になって胸をいじめ続けた。ぬめる肉塊が力の限りに押しつけられ、水着の膨らみが柔らかく形を崩す。
「う、ああ。もう、限界だっ……」
「お、俺も……は、羽連さん、出る、出ちまうっ！」

びゅるるるる、ぶっしゃあああああ！　どびゅ、びゅるるるるるっ！
もの凄い量の白濁液が水着の胸部で噴き出した。扱かれながら乳愛撫を受けていた二人が、ほぼ同時に絶頂に達し汚濁を吐き出したのだ。
「んひっ……う、あああっ！　お、おっぱひ熱っ……んふ、ふひぃいいい！」
二人分の液汁は艶めかしく蠢く胸の膨らみを汚し尽くしただけでは足りず、肩や顎先にまで飛沫を飛ばすほどの勢いだった。熱いスライムが乳に粘りつき、糸を引きながらお腹を伝わり股の間にまで垂れ流れていく。紺色のスクール水着の前面は乳白色に染められた。
「はっぁ、は、ぁ……！　い、いい……おっぱい……イ、イっちゃ……んんっ！」
二人の男子学生を解放へと導いた聖少女は、汚れた唇から荒い息を吐き、汚濁まみれの身体を小刻みに震わせていた。敏感にしこりまくった乳首に熱い粘液を吐きかけられ、限界にきていた悠美は自分自身も軽いアクメを迎えてしまったのだった。
（ああっ。わ、わたし……イッちゃった……。こ、こんなのって、ない……。わたし……こんな、いやらしいコだったの……。ああ、お願い。みんな、気付かないでぇ……）
きつく唇を噛み締め、必死で声を殺す汚濁まみれの水着美少女。僅かの間とはいえ一緒に学園生活を過ごしたクラスメートに、はしたない痴態を見られることだけは避けたかった。絶頂感に叫び出したくなるのを必死に抑え、清楚な顔をぷるぷると揺らしている。
「あらあら悠美……ふふふ。あんた、ちんぽ扱きながら……イッちゃったみたいね？」
白く汚されきった水着姿がびくん、と震える。ポニーテールの小悪魔は少女の心境を見

抜き、最大の恥辱を容赦なく暴き出したのだ。途端にどよめく二十五人の男子生徒。
五十本の視線が、汗まみれの美脚の付け根へと集中した。濡れている――精液でもなければ汗でもない、甘い香りを放つ女の蜜で、水着の股布がしとどに濡れ湯気を立てている。
「あ……や、やあ。やあああ……っ！」
ザーメンまみれの顔を真っ赤にし、首をうなだれて絶望する転校生。咄嗟に赤面した顔を両手で隠すと、手についた粘液と、顔面の白濁が混じりあっていやらしく糸を引いた。
羞恥からも屈辱からも、逃げることはできなかった。
「ねえみんな、これでわかったでしょ？　悠美ちゃんはね、エッチなことが大好きな淫乱痴女なのよ。と言うわけで、そろそろ本番ＯＫでいこっか……いいよね、ゆ～み？」
「やあぁ。そ、そん……あ、あぁぁ……っ⁉」
汚辱まみれの水着姿で身悶えする悠美。その前に、恵理子に煽動され欲情を滾らせる男子たちの分身が次々と並べられる。
「ご奉仕だけでイっちゃうなんて。顔に似合わず淫乱なんだね……へへへ、可愛いなぁ」
「こ、こんな可愛い子とヤれるなんてなぁ……夢みたいだ。も、もうガマンできねえ！」
本番の許可をもらい、性欲を持て余していた男子学生は皆獣欲に目を血走らせていた。期待感でビンビンに分身を勃起させ、男たちは一斉に転校生へ挑みかかる。
「やっ……やめて。お願いです、こ、これ以上は……も、もう、許して……」
白濁まみれの幼顔をふるふると揺すり、上目遣いですがるように哀願する。だが、そん

な怯えきった子犬のような仕草は、牡獣たちの刺虐心を一層刺激してしまっていた。
「へへへっ！　たまんねえなぁその表情……誘ってんだろ、本当にエッチな子だ！」
「うあ……きゃあぁんっ！」
背後に回った男子の一人が、乱暴に少女を突き倒した。ザーメンまみれの床に手を伸ばし、なんとか四つんばいになって身体を支える転校生。精液溜まりに突っ伏すことだけは免れるも、まるで犬のような恥ずかしいポーズになってしまう。怯えと痛みで身震いするたび、スクール水着を張りつけた小さなお尻がぷりんぷりんと揺れ躍る。可憐な少女が犬のようなポーズで身悶えるその姿に、男たちの欲情が爆発した。
「ふへ、自分からお尻突き出して……やる気マンマンだね。それじゃ、いくよ悠美ちゃん」
何人もの男が、同時に手を伸ばす。誘うように揺れる桃尻、スクール水着を押し上げて発情しきっている両乳房、見るからに柔らかそうな太もも――魅力的すぎるご馳走に、ケダモノたちが思いのままに群がっていく。
「い、いやあぁ。こ、こんな恰好で……ひゃあ、こんな一緒に……ふあ、ふああぁっ！」
にゅむり、むにゅ、むにゅっ。柔らかな牝肉に指先が食い込まされ、力任せに揉みしだかれる。犬のような恰好で恥ずかしい場所を揉みまくられ、悠美はたまらず恥辱の声を上げた。絶頂の余韻を引きずったままの肉体は怖いぐらいに感じやすく、たくさんの手に可愛がられるたび甘い幸福感に痺れてしまう。
「やあぁ、お、おっぱい……ふあぁっ！　お、お尻恥ずかし……ひゃあぁ、んふぅう！」

『第七章　絶望は終わらない』より

びゅくびゅくと断続的に粘汁を噴きながら、涙ながらに天使は許しを請うた。喋っている最中にも肉豆を潰されイキ、イカされながらもユミエルは必死で哀願を続ける。
「幾らお願いしてもダメよ。わたしは、もっとあなたが壊れていく姿が見たいの。汚辱にまみれて肉欲に溺れ、壊れていく悠美の姿が見たいのよ。レイ、イール。きなさい！」
主に許可をもらった二匹の狂獣は、それぞれ異形のペニスをのたうたせながら十字架の下に集まってきた。エイもウツボも、濁った目を底なしの欲情で輝かせている。
「羽連さん、幾ら汚れてもあなたは美しい。さて、今度は前で愉しませてもらいますよ」
天使の陰唇は自身の蜜で濡れ返り、ひっきりなしに開閉を続けている。
青黒い肉鞭が伸びて、細い先端がヴァギナに打ち込まれた。「ひっ」と短い悲鳴が上がった瞬間、もう一本の尻尾が脈打つ本体を僅かな隙間へと素早く滑り込ませる。
「ひ、ひゃぐっ！　に、二本もぉ……き、きつぃ……っ！　やめてぇ、や、ひあぁ！」
幾ら細いとはいえ、狭隘な肉穴に二本同時に挿入され、お腹の中をいっぱいにされてユミエルは絶叫した。二本のペニスは別個に蠢き、一本に肉壁をくすぐられながら、奥に進んだもう一本には子宮口を突きまくられる。かと思えば、二本の肉蛇が互いに絡みあい、螺旋を描いて膣内をぐちゃぐちゃに掻き回された。
「あひぃ！　は、激しくしないでぇ……んああっ、ふあ、んふあぁぁ――――っ！」
変幻自在な触手責めに、息も絶え絶えに悶え狂う影の狩人。淫猥な水音を立てながら、二本の肉蛇がリズミカルに暴れ回っている。はしたない牝華はそれを嬉しそうに締めつけ、

喚起の愛蜜を絶え間なく流し陵辱を歓迎している。子宮が熱い――どうしようもない肉悦に、壊れつつある聖戦士は男に媚びるような声で泣き続けた。

「へへ、二本も咥え込んで悦んでやがる。じゃ、俺は胸でやらせてもらうかな、ひひ！」

下卑た声を上げ、鰭のような指を天使の胸元にあてがうウツボ男。荒々しく上下する双丘の真ん中、乳肉の谷間に人差し指を突き入れる。汗と精液にまみれたボディスーツは鋭い爪で穿たれ、そのまま真っ二つに引き裂かれた。無残な聖衣の裂け目から、ぷるん、と震えながらCカップのおっぱいが飛び出す。お椀型の美乳は激しすぎる陵辱でじっとりと汗にまみれ、桜色に艶っぽく上気していた。先端では熟れたイチゴの実がもどかしげに震えている。魚人の両掌が剥き出しになった肉房を覆い、荒々しくこね回していく。

「んふあぁぁ！　い、痛ぁ……くぅ！　うあぁ、お願い、手加減し……ひ、んあぁっ！」

力いっぱいに乳肉を揉みしだかれ、少女は首を振って艶声を上げる。容赦なく怪力で揉まれ、マシュマロみたいに柔らかな乳房はめちゃくちゃに変形していた。おっぱいが壊れてしまうのではないかと思えるほどの暴力的な乳責めにすら快楽を感じてしまう聖少女。うねる二つの肉房の間へ、膨張しきった肉食ペニスがはめ込まれた。胸の谷間で小ウツボを挟み込んだまま胸乳を揉み込まれ、肉蛇のサメ肌が肉房を擦りまくる。

「ひひ、こりゃいいぜ。淫乱天使サマのパイズリ、気持ちよすぎてやめられねえぜ！」

「ひいっ、ひぐぅぅぅ！　お願い、お、おっぱい許し……ふあぁぁ、激しいいぃ～！」

真ん中で熱く脈打つペニスの感触と、引き千切られそうなほどの猛搾乳に、ユミエルの

胸部はどんどん熱くなっていく。さらに、力いっぱい押し潰されながら揉みまくられ、右の乳首と左の乳首がコリコリと擦れあった。
「ひあ、あ、ああっ！　ち、乳首ぃ……ひぃいんっ！」
甘く切ない感覚に、ふるふると顔を揺すって感じ入る。自分のおっぱいを道具のように弄ばれ、膣内を二本の鞭でいじめられ、甘い声で被虐的な快感に酔いしれる磔聖女。嬲られ続けた肉門は裏返ってピンク色の肉膜を見せていて、突かれるたびにどぼどぼと本気汁を噴き出し、十字架の下に泡立つ蜜泉を形成していた。
「あらあら、燃えちゃって……ひどいわねぇ悠美。あたしが一生懸命に喜ばせてあげてるのに……。やっぱり、女友達よりおちんちんのほうがいいのかしらね？」
「ん……えっ、恵理子、ちがぁ……はっ、ゆびぃっ！　おしりっ、ゆび入れないでぇ！」
魔悦に溺れながらも親友の言葉には否定を示す少女だったが、悪戯なアナル責めには耐えられなかった。恵理子が繊細な指を菊門へ突っ込んできたのだ。
ロザリオだけでもいっぱいなのに、力任せに指先をねじ入れられ、天使の尻穴は引き裂けそうになっている。それでも、溢れ返る腸液のぬめりを借り、きつい腸内に第一関節まで無理矢理に差し込んだ。そのままぐりぐりと指を動かし、狭隘な洞窟を責め立てる。
「あっぐ、ひぃぃぃぃ！　らめっ、えりこぉ、ひゃめぇっ……！　おしりがぁ、おひりが裂けちゃう……やあぁ、パンクしちゃ……ふぶむっ！　ふむ、んむふんん～っ!?」
痛々しくも艶めかしい悲鳴を漏らす唇に、突然肉の塊が突っ込まれた。乳に挟まれて歓

喜に躍っていた肉食ペニスの先端が、胸の谷間を抜け出て口先に触れたのだ。ウツボの口は先走りのぬめりを活かし、一気に口腔内に頭部を滑り込ませてきた。限界までこじ開けられ、ユミエルは口を閉じることもできず懊悩した。

「おら、パイズリの礼だぜ。喜べよエロ天使、俺の極上ミルク、直接飲ませてやるよ！」

どぶ、どぶどぶどぶ！　絶叫とともに小ウツボが口を開き、凄まじい勢いで白濁を噴出した。精液は一瞬にして狭いお口をいっぱいに満たすが、しかし唇は剛茎で完全に塞がれ逆流は許されず、窒息しないためには怪物の言葉通りに精汁を飲み続けるしかない。

「うぶぁっ……ごく、ごく……んむぅ！　やぁ、い、いっぱひすぎ……ごく、ごくっ！」

涙ながらに喉を鳴らし、汚らしい牡液を飲み啜る磔天使。息苦しくても吐き出したくても、必死になって精汁を飲みまくる。

「うぶふ……んぶ、んうぅう！　も、もう飲めないぃ……んぶぅう、だ、だめ……ぇ！」

飲んでも飲んでも絶望的に放出される妖魚の精。お口の中におかわりが充満し、汗まみれの顔が呼吸困難で真っ赤になってくる。

「ごぼはっ……ぶふっ、ぶやゅあああああああ――――――！」

絶叫とともに、聖天使の可憐な顔が粘つく白濁にまみれた。飲むペースを遥かに上回る欲望のジュースが行き場を失い、口腔、鼻腔を逆流して鼻の穴から噴出したのだ。すべてを吐き出した肉魚が退いていくと、濡れた唇から飲み残しの精汁が零れ、美乳を汚した。

「はひ、はぁ、ひぃ……あぁぁ、ひぃ？　ひぃ、そ、そこ……ひゃうぅぅぅ……っ」

壮絶な陵辱に荒く息をつくユミエルの顔が、びくり、と震えた。いままでの責めとは違う甘く切ない快感が脳を溶かす。なにかが触れている――聖少女の、一番の弱みに。
「ふふっ……ここが一番感じるのよね、ゆ～み？」
熱い吐息が右耳にかかる。ロザリオを肛門に入れっぱなしにして、恵理子が耳に唇をあててきたのだ。あの日の思い出の再現。大切な親友は、少女の耳朶に優しくキスをした。
「ふ、あ……みみぃ……い、いいっ……。んふ、ふうぅん……っ！」
ゾクゾクするほどの快美感が、一気に心を蕩かせる。濡れた唇が蠢くたび、小刻みにうなじが震える。ぴちゃぴちゃと音を立てながら、恵理子は優しく少女の耳を舐め上げた。舌と唇が敏感な耳の上を這い回る感触に、どうしようもなく感じまくる変身少女。耳穴へ舌を入れてやると、ああ、と甘く媚びた声がこらえきれずに漏れ出た。
「ああ……みみぃ……んああ、なめないでぇ。あぁ、きっ……きもちいいのぉ……」
磔にされて暴力的に犯されまくった反動で、ユミエルは弱点を責められる幸福な快美感に一気に落ちていく。白濁まみれの顔を桜色に染め、目を潤ませて甘い息を吐いている。
「ふふふ、なるほどねぇ。天使サマは耳が弱いんだ……。くくく、そそるわね……！」
甘い幸福に悶える少女の媚態に、傍観していた魔姫の情欲が鎌首をもたげた。舌なめずりしながら天使の左耳に顔を寄せ、大きく口を開いて外耳を唇に含む。
「ひ、ひゃあ……っ。あ、らめ……。そ、そっちも……あん、あふぁぁあぁぁあぁん……」
ヴジャドエクリプスは湿った口中で耳を舐め回し、たっぷりと唾液を塗り込んでいった。

人肌の温もりを持つ肉舌で弱点をねぶり回され、あられもなく感じまくる聖天使。ぬめつく舌先を耳の穴に突っ込まれた瞬間、輝く翼がゆらり、と切なげに揺れた。

「はあ……はあぁ、い、いいのぉ。おねがいぃ……み、みみ……もっと、なめてぇ……」

ぴちゃぴちゃ、ちゅぴちゅぴ……。二人の美少女が左右から天使の清楚な顔にたかり、一番弱くて気持ちいいところを責めまくる。破壊するような陵辱とは違う、女芯の髄までを蕩けさせるような魔の快感に、傷ついた女戦士はどんどん耽溺していった。犬のように鼻を鳴らし舌を突き出し、汚濁まみれの顔が桃色に染まっていく。涙に黒く濡れた瞳は影の狩人の目でなく、浮き上がるような快楽に溺れた牝犬のものと化していた。

「感じてるのね、悠美。うれしいわ……ね、耳だけじゃなくて……ほらぁ」

優しく耳をねぶりながら、恵理子のしなやかな指が首を伝わり胸へと向かっていく。激しい乳肉奉仕で赤く染まっている乳房をもみくちゃにしながら進む温かい掌。もどかしげに震えている小さな果実を爪先で軽く弾かれると、ユミエルはぴくん、と肢体を震わせた。

「え、えりこぉ。そこ、いいっ！　すごく、感じちゃうぅ……ひぐっ、んぐあああっ!?」

親友とのいけない遊戯に甘く悶えていた少女の唇から、怯えのこもった嬌声が上がった。耳とおっぱいだけでなく、足の付け根からも猛烈な快感が立ち昇ってきたのだ。ぐちゅぐちゅと激しい摩擦音を上げながら、二本の肉鞭が猛烈なスピードで抜き差しされている。

「どう、悠美ィ？　気持ちいいでしょう、幸せでしょう……？　くく、あはははは！」

狂った哄笑が耳骨を通して直接脳に聞こえてくる。魔人がエイのペニスを掴み、激しく

動かしているのだ。肉鞭をバイブ代わりにして、魔姫は思う存分ユミエルの肉裂を突きまくり責めまくる。その最中にも、ぬめつく舌が耳の中へ何度も何度も抜き差しされていた。

「だ、だめ……そんっ……ぎひいぃ！　う、動かさないでぇ……あ、ひあああぁぁっ！」

耳をいじめられながらの淫裂責めに乱れまくるユミエル。耳の穴が切なくて、お腹の中がめちゃくちゃで、その二つの感覚が連結して少女の神経を焼き尽くす。くちゅくちゅと音を立てながら耳をねぶられ続け、溶けるような快感がそのまま子宮に伝わってくる。敏感に火照った肉体が意思を離れて、勝手にどんどん気持ちよくなっていく。快感の泥沼に溺れ込み、ユミエルは戻れないところまで堕ちてしまっていた。

「はひぃ、ひぁ！　い、いいのぉ、もっと、もっといじめてぇ……！　らめぇ、わたし、も、らめなのぉ！　み、みみがぁ……はひぅ！　やああ、ま、またイク……ぅ――――！」

ぷしゃあああ……。官能の虜となった聖天使の秘陰から、噴水のように勢いよく牝蜜が噴き出した。と同時に、エイの肉根から粘つく汚濁が大量に発射される。二本分の精液は小さな膣に入りきらず、天使は潮を噴きながら精液を漏らし続けた。その間にも美少女たちは堕ちたる女戦士の耳を責め続け、絶頂の最中にさらなる快美が送り込まれてくる。

「あ……あふぁぁぁ……ひっ！　イ、イクッ……らめぇ、み、みみイクッ、アソコでもイクッ……やあああぁ、ママぁ、えりこぉ……ひいいいっ、も、もうイカせないでぇ～！」

耳で。胸で。尻で。膣で。止まらない連続絶頂に、羽をばたつかせてイキまくる淫乱天使。磔にされた肢体が辛そうに痙攣し、二本挿しにされている秘唇が断続的に潮を噴く。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/